

コラム

「七月のトリリウム」

松尾誠之（本会理事）

歴史小説家・浮穴みみの作品に『七月のトリリウム』という短編の佳作があります。彼女の作品には島義勇や松本十郎等明治初期の北海道開拓に尽くした功労者を軽妙なタッチで描いたものが何点かあります。

標題作の登場人物は札幌農学校初代教頭ウィリアム・スミス・クラークと開拓長官・黒田清隆です。二人の間に起きた対立が作品のテーマになっています。すなわち学生向けの教科書として聖書を用いたクラークと教育プログラムからキリスト教を排除したい黒田との方針の大いなる相異です。

明治六年に太政官布告によりキリシタン禁制が解除されたものの建前上のことで明治新国家の方針と相いれない異教であることに変わりなく、とりわけ薩摩出身の黒田にとってみれば島原の乱を始めとし身近なところでキリスト教の絡んだ一揆が起きていただけに国の基を揺るがしかねないものと映っていたはずで



オオバナノエンレイソウ

話は北大の校章にもなっている「オオバナノエンレイソウ（トリリウム）」を軸に展開していきます。クラークは発芽してから花が咲くまで十年かかるトリリウムを引き合いに、学校教育の成果をあげるためには時間はかかるが全人格教育（リベラル・エデュケーション）の必要性を説きます。「目標とする教育は、すぐに結果が出ないかも知れない。しかし教育とは、本来そういうものではありませんか。根気よく土地を耕し、種を蒔き、収穫を待ち・・・考えると、教育と農業はとてもよく似ています。」すなわち実学を重視した専門教育に加えて教養教育（リベラル・アーツ）を車の両輪に据えて人づくりに資するべきだと言います。そして黒田はとうとう徳育の一環として聖書を修身学書として教育の場で使用することを黙認するに至りました。クラークが種蒔きしたピューリタリズムに根差したリベラル・アーツの精神は

アメリカのマサチューセッツ州から北海道に移植されて現在に引継がれています。

<参考文献>

『七月のトリリウム』～浮穴みみ『楡の墓』（双葉社 2020年）収録

クラーク博士の馬上像の寄付者銘板について

馬上像の建立に当たって、寄付者の方々のご芳名を銘板に記載します。

◆ 記載の対象者

- ・ 銘板へのご芳名記載は、2026年7月末までに個人3万円以上、法人10万円以上をご寄付頂いた方を対象とします。
- ・ 複数回寄付されている方や追加で寄付される方は、合算した金額が上記以上であれば記載させていただきます（公表「可」の方とイニシャル公表の方）。

◆ 記載方法

- ・ 記載のご芳名は、寄付申込者以外や故人でも差支えありません。
- ・ 複数のご芳名の記載をご希望の場合、記載者1名につき3万円のご寄付をお願いします。
- ・ 記載のご芳名は、アイウエオ順を原則としますが、家族などの場合は苗字が異なっても並べて記載します。

◆ ご寄付の申し込み

クラーク会ホームページの「アンビシャス基金」からお申込み頂くか、パンフレットに記載されている銀行口座をお願いします。

クラーク会 HP : npo-clark.com



活動日誌

- 7月4日 基金募集札幌班会議（毎週金曜に開催）
- 7月12日 第6回理事会
- 8月9日 第7回理事会
- 9月13日 第8回理事会
- 10月1日 講演会「クラーク博士と音楽のタベ」
- 10月11日 第9回理事会
- 10月30日 第1回馬上像建立記念誌編集委員会
- 11月8日 第10回理事会
- 11月19日 緑陽中学校2学年「講話」
- 12月13日 第11回理事会